

ストーリーを活用する

～まちづくりのための南アルプス市の模索～

南アルプス市教育委員会 保阪 太一

1 はじめに

「君たちは歴史が好きなんだろうけど、住民からはニーズないから。住民のニーズの無いものに予算は付けないから」と言われたのが合併直後の文化財マップの予算要求の査定である。

山梨県南アルプス市は平成15年4月1日に4町2村が合併して誕生した人口約72,000人の市である。山岳観光と果樹観光がウリとして挙げられ、高低差に富んだ地形はこの地域独特の文化を育み、豊かなストーリーが紡がれてきた。その現れのひとつが果樹産業として現在の本市を支えているのだが、むしろそこかしこにその軌跡を物語る歴史資源が溢れていることこそが本市のウリだと考えている。埋蔵文化財もそれを示す一つである。

個性あるまちづくりが求められている現在、このような「地域らしさ」を語ることでできる文化財などの歴史資源の価値を住民が理解し、継承したうえで活かすことが不可欠となってくる。しかし冒頭のように、合併当初は理解度が低かった印象がある。まずは「調査・研究」し「保存・蓄積」させることと、それらを「教育普及」・「活用」することを両輪で行うことを徹底した。いわゆる「地域研究」を進め「南アルプス市らしさ」を語ることができるとモノを顕在化させ、多くの市民と共有・共感すること、また、あの手この手で歴史資源を知る機会を増やし、身近な存在とすることで、潜在的にあるはずの文化財に対するニーズを掘り起こすことを意図している。文化財保護法第1条にある「文化財を保存し且つ活用を図り文化的向上」を地で行くことに決めた。

私達のような地方の小さな自治体が考える「文化財の活用」とは、保存と一連のもので、「まちづくり」や「人づくり」「未来づくり」のためのものであって、文化財はそのための「資源」と言うことができる。それらは教育や防災、コミュニティの形成、産業などに資するものである。「観光まちづくり」という言葉が示すように、まちづくりにはもちろん「観光」も含まれる。本市では「観光のための活用」とは考えていないが、同時に保存と活用を対立概念として捉える考え方も持っていない。経済活動重視の乱用による文化財の棄損や消耗、脈略と関係のない悪用は断じて許されないが、むしろ調査成果が市民に還元されることで多くの人々がその重要性を共有し、共に魅力を発信してくれることで理解が広がり、文化財の保存や継承に直結するものと考えている。そもそも保存と活用は切り離せない。観光まちづくりでの地域資源の考え方も本質は同じであろう。また、どうしても「モノ」ばかりに目が行きがちだが、その背景にあるストーリーこそまちづくりに活用すべきものとも考えていて、ストーリーをいかに住民の皆さんと共有するかが命題と考えている。

本稿では、歴史に裏付けられた豊かで魅力ある地域に「誇り」をもち、地元を好きな人で溢れたまちになることを目指して種をまき続けている試行錯誤の様子を、地域資源、埋蔵文化財の活用という視点で紹介する。

2 「文化財課のお手伝い」～多世代とのつながりを育む～

まずは本市の取り組みの大きな流れを紹介したい。先述の通り、住民のみなさんが埋蔵文化財などの歴史資源に接する機会をあの手この手で増やした。出前授業や史跡の案内などをまとめて「文化財課のお手伝い」と名づけ、小中学校はもとより市民団体や地区の寄り合いに至るまで軽バンに土器等の「本物」を積んで出向いた。当初は博物館施設がなく、それこそプロジェクターを持ち込んで飲食店で講座をするなど、まさに草の根で市民の皆さんとつながってきた（年間250件ペース、歴史だけでなく国語や理科などあらゆる授業、必ず毎年学校ごと授業ごとにカスタマイズ、市全体の話から大字単位まで、教員の研究グループに加わりお互いのニーズとストックを把握）。また、市の歴史的特徴を抽出し重点的に調査するなど地域研究にも注力し、成果はなるべく即時的に発信している（市の広報誌の連載、HP、SNS等）。そのような活動が功を奏したのか、住民からの要望で、「ふるさと文化伝承館」（既存施設）が文化財保存・活用の拠点として文化財課へ移管されている[R3に博物館登録、スタッフによる案内、ストーリーに則した体験メニュー（後述参照）]。

市民と接する際、ガイドマップやガイドブック等、「現地」での体感を補助するツールを整備してきた（手作り→補助金利用）。その際、普段文化財と接することの少ない世代など「他世代」・「多世代」の関心を得ることと、「目に見えないもの、気づきにくいもの」へも関心を持ってもらうことを意識している。〔記録保存調査地点の遺跡説明版（H17～）、小学生の手描き説明板（H19～）、小学生の音声ガイド付きサイト「文化財Mなび」（H23～）、記録保存の遺構を現地で体感できるアプリ「MなびAR」（H24～）等〕。また、記録保存の発掘調査でも可能な限り小学生の発掘体験を実施している。国史跡「御勅使川旧堤防」は継続的な調査と普及活動を繰り返し実施しており、小学4年生の治水の授業で案内する際には15分程時間を割いて堤防にたまった土の清掃活動をしている。現在実施中の史跡整備事業でも、石積みの修復作業や公園整備に市民や子供達が大勢参加している。また農業系NPO法人と協働してヤギによる史跡の除草も行うなど、市民との繋がりを大切にしている。

3 掘り起こし・育み・伝えるプロジェクト-ファミリーヒストリーを紡いで地域のストーリーを語る

平成29年「ふるさと〇〇博物館～掘り起こし・育み・伝えるプロジェクト～」という、地域の歴史資源を住民と共に掘り起こし、伝え共有していく事業を開始している。指定無指定に関係なく市内のあらゆる歴史資源や遺跡、人をつないで市全体を博物館とみてるものであり、忘れられていたような身近で何気ない歴史資源を市民と共に掘り起こし、文化財課で正しい価値づけを行い、アーカイブして共有していこうというものである。民具やアルバム、思い出話などから見えてくる個人や家族のヒストリーを大切にしており、これらをつなぐことで地域のストーリーが見えてくるものと考えている。このストーリーこそが「地域ならではの」「地域らしさ」を語るものと考え、存分に活用すべきものと捉えている（利水、果樹等、）。その過程で歴史資源や地域を誇る「人」を顕在化させ、魅力ある地域や地域コミュニティ、シビックプライドを醸成し、地域力を高めることを目指している。その際蓄積させたデータの利活用を促進する目的で、東京大学大学院の渡邊英徳教授の研究室と共同研究を行い、デジタルアース上に歴史資源であるモノ・コト・人の記憶を配置した「〇博アーカイブ」を製作している（H29・30）。語り部は住民全員。瞳を輝かせながら半径30mを誇りを持って語る住民で溢れさせたい。

4 地域のみなさんとのつながり、ストーリーを活用する

埋蔵文化財の活用は、遺跡やその背景、その他の文化財を絡めたストーリー等を総合的に活用すべきものと考え実施しているが、ここからは出土品という視点で取り組みを紹介する。なお、そもそも興味を持っていなかった方を振り向かせるための取り組みなので、入口を広げること、敷居を下げることを特に意識している。

出土品において、まずは展示公開、さらに資料に触れる・使うなどの体感、レプリカで調理体験、立体土器パズルなど、一般的な取り組みはそれなりにおこなっており、その際五感を使うことと記憶に残すこと（感動）は大切にしている。特徴ある点としては、土器パズルには接合できない破片をあえて複数加えたパズルセットにしたり、土器表面の圧痕にシリコンを入れての圧痕調査体験、ヤブツルアズキの味見、治水技術の蛇籠のミニチュア作り、また「牧」の遺跡から牛骨が出土することから「蘇」作りや、近世の藍甕の分析等から藍建ての復活や藍染め体験等は本市ならではのメニューと言える。また、出土品に触れてもらう場合、注意をはらったうえで、あえて展示ケースからその場で出して触れてもらうなどの記憶に残る工夫もしている。

出土品の周知に関しては、ある程度の選択と集中、段階的な戦略も必要と考える。例えば興味の無い方には、まずはスター選手や「センター」を売り出してすそ野を広げ、興味の段階に応じて徐々にレギュラーメンバー、さらに練習生と、よりマイナーで通好みな方へと広げていき、やがては網羅的なアーカイブや報告書へと誘うことになる。その点をふまえ、興味の入口として最初に注力したのが、後に日本遺産に認定される縄文時代の資料たちである。特に海外展常連で縄文文化の代表格と言える**鋳物師屋遺跡の円錐形土偶と人体文様付有孔鏝付土器**からで、これらはことあるごとに周知しているつもりではあるが、それでも知らない方は知らない。

日常の中に縄文を感じ、命を考える

「鋳物師屋遺跡」出土の「円錐形土偶」はおなかの赤ちゃんを慈しむ妊婦さん姿で知られ、平成27年に市民の投票で「子宝の女神 ラヴィ（命）」と命名され、「命」をテーマに市民とのつながりを育むシンボルとして活用している。同時にキャラクターとしても展開し、土偶キャラのネット選挙で見事優勝、SNS世代への周知にとて

も効果があった。個人的には世界共通の「命」の象徴になり得るとさえ考えている。

それに先だって平成 26 年からは、子育て支援を推進する地元の企業（自動車販売）と子育て支援NPOとの協働により、ふるさと文化伝承館の縄文展示室で「ベビーくらぶ」を定期的に開催している。0歳児の親子を対象に「子宝の女神ラヴィ」に見守られて親子で命を育む集いで、ベビーマッサージや縄文のお話などをおこなっている。すぐに定員に達する程の人気で、赤ちゃんがいる縄文の展示室はやさしさであふれ、数千年と途切れることなく繰り返してきた命の連鎖の上に現在の私たちがいるということが実感できる。また、ラヴィの姿をしたエアードーム型の胎内体験ツールは、妊婦さん姿の土偶ということで、ラヴィのおなかの中に子供たちが入る点がポイントである。これらの取り組みは、博物館から一番遠い存在と言える**子育て世代**や、小っちゃな子供達が楽しみながら知らず知らず地域の歴史に触れているという仕掛けである。

地域住民と縄文のコラボ 地域コミュニティで共有

ラヴィちゃんグッズも各種揃えているが、**赤ちゃん用のスタイやハンカチ、両手が使える肩掛けのトートバッグ**や車に貼る**赤ちゃんステッカー、ぬいぐるみ、おむつポーチ、ラヴィちゃんパン**等「子育て」というコンセプトと、市民や企業のみなさんとのコラボを大切にしている。今では市民や企業自ら商品展開をおこなっている。南アルプス市にあるベーカリーループルさんでは、ラヴィの顔をあしらっただけでなく、鋳物師屋遺跡の土器の圧痕調査から判明した「ダイズ・アズキ・エゴマ」を具材にした「**ラヴィちゃんパン**」を販売している。頬っぺたの豆を外すと圧痕ができるという、まさに研究成果も反映させた「このまちならではの」資源としての活用例である。入口は広いのにマニアまで楽しめる。市役所でも、健康増進課の**少子化対策担当**として市長から辞令をもらい、**おむつ引換券**や妊婦さんへの検診の通知、住民票等をお渡しする封筒にも登場している。「おむつポーチ」は優れた解臭技術を持ち高級車ブランドのグッズなどを展開している市内企業さん（BtoBメイン）が、ラヴィを紹介することでBtoCとして商品展開している。遺跡の存在する下市之瀬区の高齢者サロンのボランティアは「**ラヴィの会**」と名付け活動し、地域の誇りとして定着している。また、縄文時代からの組み合わせと言える鹿皮に漆を用いた山梨の伝統工芸「甲州印伝」の**ラヴィちゃん名刺入れ**は、名刺交換の時からまちのPRを全開で行える。宝飾の町山梨ならではの**水晶ラヴィ**（他の日本遺産ともコラボ）や**純銅製品、純金ラヴィ**もふるさと納税の返礼品として活躍。さらにはラヴィのキャラは人気アニメの「映画ゆるキャン△」にも登場している。

このように、最初こそ市主導で商品開発をしてきたが、後は多くの方がラヴィを題材に商品化を始め、独り歩きしている。まな板に乗せようえで正しい調理方法（使い方）を示してあげるまでが市、そうすれば市民自らが使ってください。この流れが理想的ではないだろうか。

ラヴィに続けと、ツートップの相方は2021年のドキドキ総選挙で優勝し、「ぴ〜す」という愛称を市民の皆さんに付けていただいた。現在中学校歴史の教科書の表紙を飾っている。ぴ〜すのグッズも皆さん作ってください、「**ラヴィ&ぴ〜す**」として人気である。現在ではぴ〜すのペン立てが役所などの公共施設のあちこちに並び、身の回りに縄文があふれる仕掛けを始めている。また最近では市内の平飼卵農園の青年がラヴィやぴ〜すの3Dデータを作成してゲームの「フォートナイト」に「**ラヴィの大冒険**」なる空間を作ったり、その他にも楽しく強い応援を頂いている。マイナーな土偶も市内の木工作家さんにより商品化され、また、その他の小さな土偶たちを狙ってデザインされる作家さんもあり、次の段階へと広がりを進めている。また、ラヴィで言えば初心者はキャラクターデザインを好み、マニアはリアルな土偶のデザインを好むという傾向がみてとれる。

このように**一見歴史や文化財とは関係のないように思われる皆さんと大いにつながっており**、その存在が大きい。周りの方に恵まれ、魅力ある方々がまた魅力ある方を繋げてくれている。モノを作ることよりもその**モノを介して人が集まり、地域資源や地域のストーリーの理解が広まる仕組みづくりや共感を生む仕組みづくり**をイメージしている。最近だと飛騨市の石棒クラブさんや八尾市のしおんじやま古墳学習館さんのような、それぞれ内容は違うが出土品を軸に人が集まる仕組みづくりと言え、素敵事例だと考えている。

5 おわりに

少し前のこと、ふるさと文化伝承館を訪れた幼稚園児たちが揃って「**パンだ〜!**」「**ラヴィちゃんだ〜!**」って

リアルな土偶を指さしていたことがある。この幼稚園の給食にラヴィちゃんパンが出ていたとのこと。そう、そんな感じで良いのだと思う。6歳にして地域の資源を覚えているなんてかなり最高である。

本市の取り組みは、歴史資源に裏付けられたオリジナルな魅力あるまちづくり・未来づくりを行なうための地道な種まきであり、文化財や地域資源を活発に活用し、住民と一緒に楽しみながらつくりあげていくことを意識してきた。これまで接する機会が無かっただけで、実は身近な歴史を知って面白いと感じた方が案外多いということに気づく。やはり、機会の創出は必須である。さらに関心者層の拡大には「感動」が必要で、「遊び心」と「サービス精神」も求められる。ただその根底にあるのは、やはり専門的見地による調査研究と適切な保存である。埋蔵文化財で言えば考古学という専門性は揺らいではいけない。そのモノ・コト・ストーリーの本質的（歴史的）な価値や魅力を適切な方法でわかりやすく紐解き、顕在化させることで、身近に体感できるようにすることが活用といえる。それが保存へとつながるのだから、通常の文化財保護のサイクルに他ならない。

私たちが大切にしていることは、ストーリーを活用することである。劣化がない上に共感を得やすい。地域のストーリーを多くの方と共有することで、地域資源への理解も増して保存への好循環が進み、シビックプライドの醸成や、市民の満足度の高い魅力あるまちづくりが進むものと考えます。

観光の視点で言えば、本市の取り組みは住民とともにディスティネーションの魅力向上に取り組んできたと言える。ここで共有されたストーリーが「地域ならではの」を語り、なおかつ住民が目を輝かせながらそれを誇りに思い、魅力的な状態でお迎えできることが大切と考える。ここで、外からの来訪者に評価してもらえたならば、地域を誇る心や愛着はさらに増すはずである。また、埋蔵文化財の出土品はこの地の暮らしをダイレクトに示し、魅力的な状態で紹介できれば多くの人々を惹きつけることができる。さらにこの地域を訪れないと直接知ることができない唯一無二の存在とも言え、観光まちづくりを考える際の大切なポイントを備えている。

埋蔵文化財や歴史資源を魅力あるまちづくりやひとづくりの資源と考える認識が育てば、理解もさらに深まり、種に水を撒いてくれる仲間が増えることだろう。ともに魅力を発信することで、さらなる文化財の保護や継承につながり、歴史に裏付けられた魅力的なまちづくりができるのではないかと。未来のまちに素敵な花が咲き誇る日を目指して、今日も種をまき続ける。

